

ながら族

外山滋比古

長崎で幼稚園の園長をしているというドイツ人神父に会った。

こどもの教育はまず母親からという考えでお母さんの勉強会を始めた。ところが、すこしもうまく行かない。欠席する人が多い。来た人の中には居眠りする人もあって、神父さんは悩んだ。どうしたら熱心になって聞いてくれるか。

そのうち、スライドを見せるようになったら、急にみんなの目が輝き出した。味をしめた園長さんは、こんどはNHKテレビの「大きな草原の小さな家」をビデオにとつて見せた。これが大当たり。出席者がふえ、乗り出すようにして見る。それだけでなく、講話も真剣にきいてくれるようになった。

神父さんは、こういう結論に達した。お母さんたちに話

をしようと思つたら、何か見せなくてはいけない。ただ話だけ聞かせると、コックリコックリやり出すか、来なくなってしまう。

布教ということに命をかけて生きてきた人の観察はさすがだと思つた。女の人は、話だけきかせては、ダメなのである。私もこのごろようやくそれがわかりかけてきているだけに、この神父の話に共鳴した。

どこの女子大でも、教室の学生が私語するのに困っている。叱つても叱つても、かならずしゃべるのがいる。外へ出て行け、というようなことを言うと、さすがにその時間だけは黙っている。しかし、聞いているのではない。声にならない声でおしゃべりしているのだ。

せつせとノートをとっているのはしゃべるかわりに手を

動かしているのかもしれない。ノートをとらないで、しきりにうなづくのがある。新米の教師は、それを、よくわかって、話の内容に賛成を表明しているのだなどと誤解する。そんなのではない。ただ、首を上下に動かしているだけで気が休まるのだ。まるでわかっていなくても、「そうですね」というところへ来ると、条件反射的にコクリとうなづく。

考えてみれば、学生もかわいそうだ。殺風景な教室である。黒板には小さな字が並んでいる。その前に貧相な机があって、いっそう殺風景な教師が立っているだけ。そんなものを一時間も二時間もにらんでいられますか、ていうんですよ。彼女たちはそう思っているに違いない。

せめて、おシャベリでもして、うっとうしさを忘れたい。書くことはないけれど、字を書いていけば、気がまぎれる。コクリコクリうなずいていけば時間がたつてくれる。さもなければコクリコクリ居眠りの船でもこぐほかはない。

そういうのが、数年すると子を生む。そこからさきは想像を越える。

いつか小学校一年生のクラスを参観した。お母さんたち

が参観している。おどろいたのは、母親たちが勝手にしゃべっていることだ。あまり腹が立ったから、新聞にこんな親は授業参観をする資格がないと書いた。すると方々から反論が来た。もちろん同類の母親からである。それぞれ原因にならない原因をあげているが、教室の学生のおしゃべりと変わらないと思ったから黙殺した。

女性はどうやら、生れながら、ながら族のようである。ひとつのことだけでは満足しない。同時に二つのことをしてちょうとよい。そのところを、いまの学校はハキ違えている。私はこのごろそういうふうに考えるようになった。

そういうお母さんが、こどもを育てる。こどもがながら族になるのは当たり前である。私は、別に、ながら族が悪いと言っているのではない。いまのような複雑な世の中では、ひとつのことにはしか注意が向けられないという集中型ではかえって不都合が多い。

ただ、問題は、ながら族をいかにして、精神統一へ向かわせることができるかである。長崎の神父さんはビデオで成功した。われわれもそれで行くか。

(お茶の水女子大学)